繪本孝感傳　九

へ 13
3581
9

繪本孝感傳巻之九

目録

孫女子岳義再會の話

石上尼人瑕ふ後来氏示す図

石上道人右近が安否氏示す話

其二

陣中射的青雲氏侍る図

荻田姓名氏更へ太長寺に仕ふる話

浅田が雛氏殺す図

早稲田大学図書館
門 さ 13 號 3581 巻 9
早稲田大学図書館 昭和 35.1.22 受入 寄書

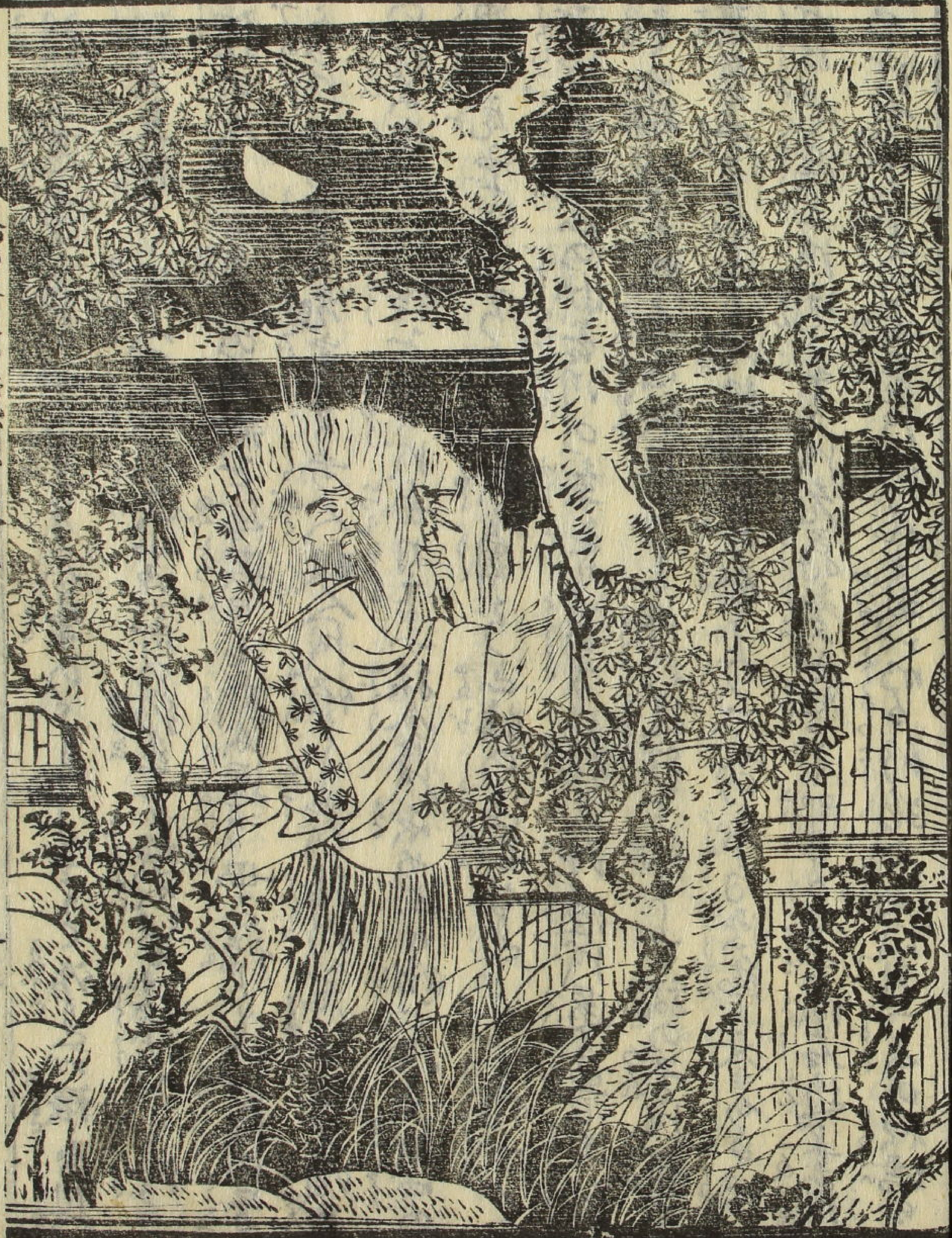
浅田老智を用ひて猛を済ふ話
婦姑ぐく妾が縊殺圖
其二
死靈妝報ふ乃圖

絵本孝感伝巻之九

環母子安恙再會の話

孝順貞烈は天性の誠より出て其中一毫も人為は較ざれば自ら神明の冥助ありて免難れの禍害を脱し必ず至るの危急を遁る古え今京其例数ふるに遑あらず爰に農民名を春城小次郎と伴ひて一郷里に好母孀ふくして若くし亡ぬ母を奉ふる子の性質に偽まる所見るより其子て心服し来りしや養育してやる日ゝ夜を寝くなく是ぞつくれと捨捨てし其後同じ先の母を向ざ小次郎長しく母が苦労を思ひ山城の菜に漏る貯ふ命を頂きとする何ぞ計らん其貧絞るるとの志ん年我父母の仁恵は語しし母ん中忠を積みし十年子を其時の恩義と恩を読を勝だへ送ん事とし途中いろいろして道路に迷ひ國に

石上
仁人
環
綾
まと
おる
経



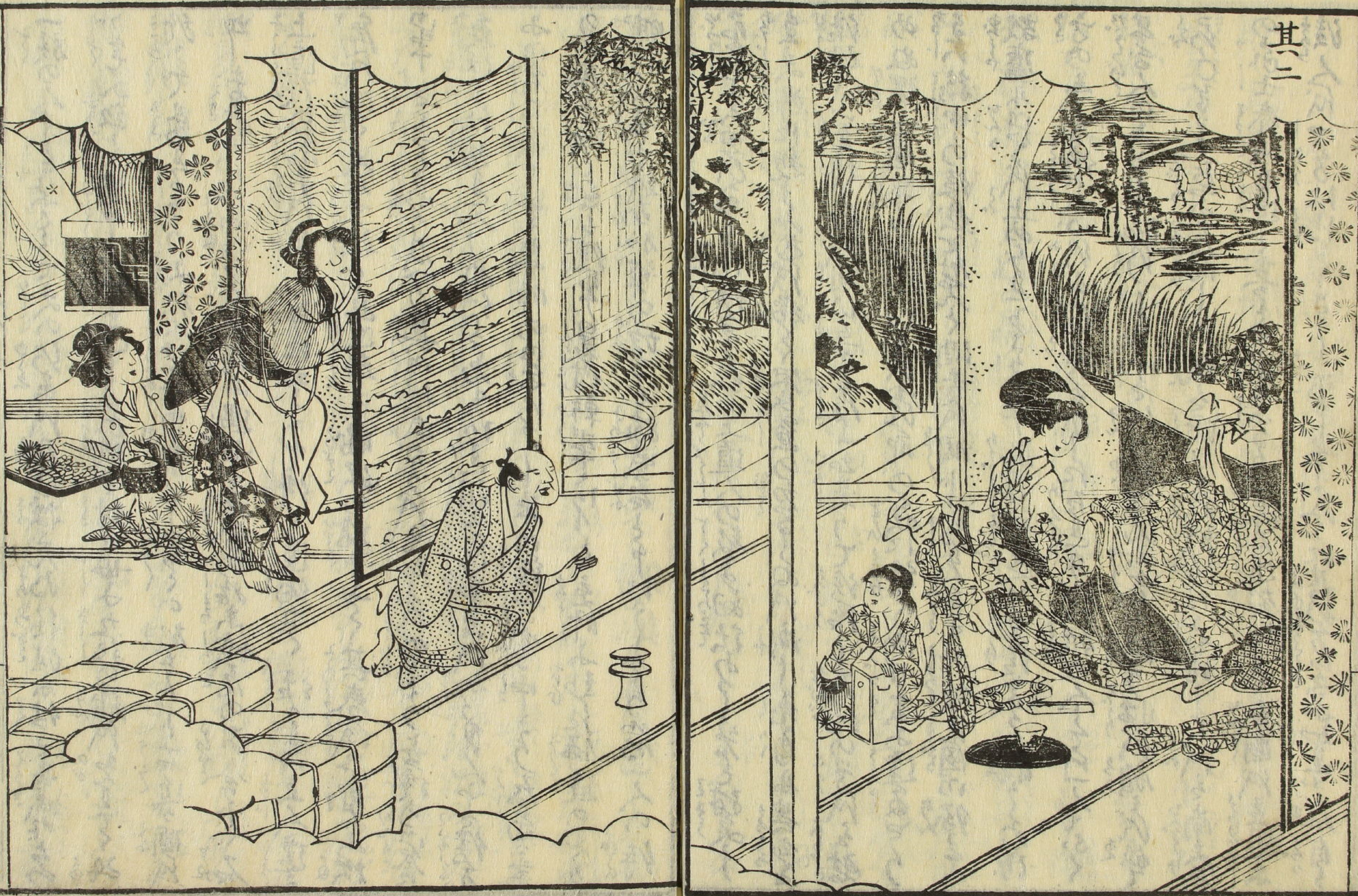
此地に還来り再び母に逢まゐらする事のうれしさよと語れバ環も此
歌を立帰らく里人の助けを受小次郎の行末を尋求むる由状をも語り
驛の人ミ母子を労りの神術を述其日を斯に過り母子諸ともに此夜の労
を休め翌日兄実あるを人殺人を以て再び旅行を催ふるが頃日
の病に煩らく行程を貪れ毎日なる旅舎を求め三日路を経て越中の
國城尾にぞ着きけり此より国の境より山路の遠邯あれども先程かく
折濡折封山の旅苦川の事ども其方に落ち跡徑を選る農夫牧
童の鄙びる賎画図頗れありし那須道程を指して旅の労を慰め
其日も暮なんとする時旋塘の前面より一人の老翁瀑然と入来る環
折拂て添ふを聞けば老翁勢を待く那なるハ是城右近が妻環
ならずや海丈夫の安否を知んと欲せバ行路に交で付一本の松塘の

前面へ枝を指出せし家に宿を求むべし然バ動静を知るべしとのたまひて
ふつと環異しく熟視すれバ此老翁こそ先に丈婦が苦難に遭ひたる環
益孫が危に臨むに当て先に此方へ入せ給ひて語られても道人の神に捧我
今も猶く人方の夫が猶りもいかでも右近の旧交をあらん海の負ひを
悩み姑く此一事に存んが為夫に来まり其他をも示すべき事なし今
よりして後益く操を守らバ汝に志を遂しめ丈夫の家名を輝かせむ
ん情み怨しく思ふ事なく見て玄指く忽塘の邱に出て見えまじ竟
も疾風の至るが如き飄然として雲霧に入ぐるが如く行方を見失つり環
怪くが待怪然と立居りしが道人の辞の瑞兆とふかく心に信く丈夫の
安否を訪ふ不来なく思へば再び居所に居き家をも定べバ其夜を籍
くとも汝が此所に宜しと待ちぬ

石上道人右近が安否を示す

斯て其夜も明しかバ環ハ道人の教に心せられ丈夫の為なれバ便宜を
聞えまほしやおもひけん母より疾く旅舎を出立今年の卯月田里郷村の
続居にいたる迄て心を付く行くら思の外に到て是ぞ道人の云れし
爲る人の住居なるべしと松の大樹壊れかゝへ長く指出たる旅舎あり環
先づ木の幹を上にて遊びつゝ痛けかゝ腕を幹に挿よ岩あり時刻尚早しとて
それより頭に岩を枕めんとて此旅舎の前にひそかに座を占めて居るに
目を閉て眼を開く事ともなく何ひ見るに帯刀の男ども一人も居れる
旅人多く渾家の奴婢も帳ありげに寝て己が同士笑ひ戯る其事多く更
婦も児子の族あれども同く外貝を設け惜みて寐ざるも定の節
の旅舎に寄る婦もなく丈夫の安否を知るべき便ありとも覚えざりしが

不思議と心に思ひ出ぬ凡俗ならぬ石上道人の教ゆる細注あることを深く感じ
主丈婦に親しみ我が絡く食道の忽まち浮んで心を決し兎角に其処を
結びしかバ主持よ心を用ひ丑の刻に出来りて流れしむ路の半ばを去るに
めぬ環と因果ありし、はまづ出立の前の夜に縫く両日宿に逗留せり
主ハ旅中の結縁を賀して酒肴を調ど親も自も折節に国に帰りて
教盧に引籠ん止めらるゝに従て半歳斗は兄之に見送られ
云の志ざしも降りて女の行李を携のひしに旅立すに所縁の人も亡くなりて
其旅人のみならず薙鎌を留かれたる何の教なく宿の銘に縫の顔を改め
我をそれ其宿に向しが環は渡口に乳を得たる乳母して紀る南の家
の武士春城右近とぞ言ふなる者あるが丈夫の道教けて本国を立退ぬ
浪人を思ふに誠さうしかくるは今に其行方を尋ねて

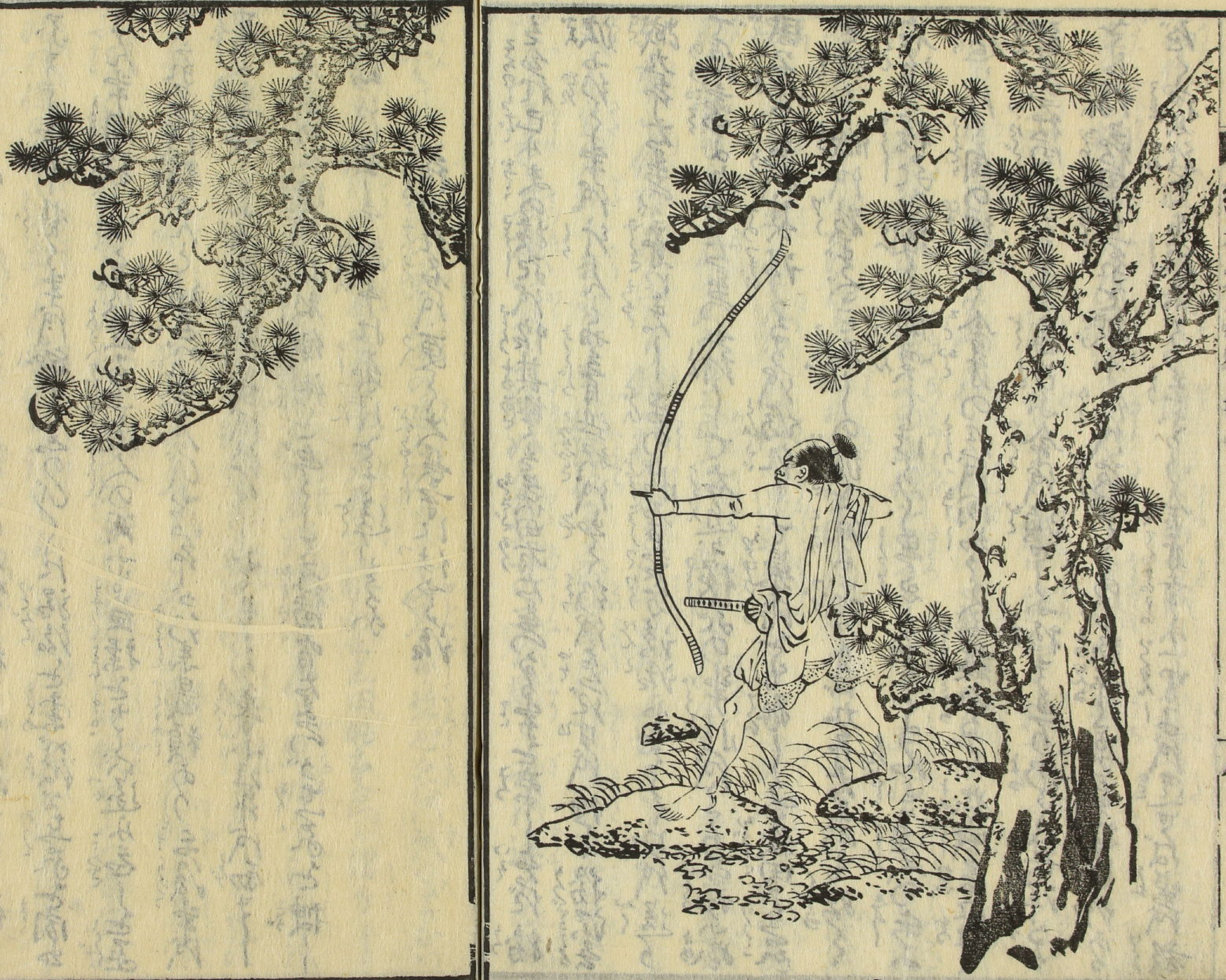

其二

一族の人々と共にありて夫の行末を尋ねて捜さんため藤沢に住る妻娘のもとへ
行くとて赴く途中山賊の為に道を塞がれ家財を奪はせ母子九死の難を免れて此
所まで来りけり又故に此家に宿りしは其の故なりと右近が聞ば
如く兼ての髙山ゟて族難に遇し母子毎夜の路にて城尾の家に会して石
上道人の教示を受し事に至るまで件々遺漏なく語るを聞て立人は
原は深く夫の年数にして此道観へく勝沢の郡下ゟて其の奉公を尽さばか様
其事を見る事など及て其の親戚なれば初めは時より奉待の心を
盡仕し社祝を云へぬ何事も心を尽し相公の安居は初めより遺方
二の宿あるべし尊師の御宗に心を一々事の後と懸る中より旅あるに事
のは其子細くる云ふ役事暴斉翰来けりし宣師に趣き帰逢のこと
晴れて及ぶ越加賀の境なる城郭を上申にさし立て此時一人の侍

遂して侍るく家来かしら塩見僕が見して側の姐に身の遺し置其
跡に遺教する物あり故々其侍の手持の封るを告知らさんと其近は披求
しつゝ何程へ付るん筈々人数あつまるべきを指ひ出て晴く去らしに
お路銀を渡し行き自ら來たる途中に横死の人ありて主人の旅人
上は下るに至りて路銀を遣すなり其家族を始め先生遠国へ行の
不寄なりと云はしむる中かれ告らで連累となるべき旅行の好しき氣
まく通るなく扱て其事を人に告れ披ろし何も其付の侍にて今に
披見たれ其くさしなき様さるも横死の人は衣類の役所に官人
の御役と見じられし事の子細理へかへ故く告れたるに所や又来るとかや
聴くと其あるかり前半にや件人識の御處に入しもせ顔く彼方へは
存知して環が身に関さぬ環よりは所を立ての旨は國内より故を又夫の

渠等ありと聴に激怒して遮りしも其一の方は見るに遠かく右近が額
左の折柄蹄嘴及び没後の肴を賄し包袱にく那裡の家も出でし主
は又一の方は見て其用じ如くなる懐中綿にく袖に其小酒女の銭を
納めし由に萩田有右衛門と紀し名刺まさ数箇の縁あり環是二個は
目今なる事は有之し益者の函傳を見て悲念更に猶に遁る所を許
然さんとせしが小次郎が細心に手は落さは登らぬんとく主者婦に目は
以て其処は知りしたれは侍に遇ふは此品を見るに丈右近が懐中の
物を見あるまでく我さる人もあらず之を人輻湊の旅舎なく悪徒に奪すへ
らく事も信けるれ只けり尋よ横死の上は小刀は以て手に封せまるは免しも
丈よも定め訟し去むは本は怨恨まるべし此品は證て此方へ必す来なし
は三人は主よも其様は疑て恰好に急々二の主は賄く社は退くぬ環

を知便已に主の横死は悟其變を萩田有右衛門なる事を察し急ぎ揚
沢に行く事は計りんと初て其所に此趣は出て紀は発見は因は縛く捕る
城九郎右衛門が宅に赴し其の情を告方語話に急ぐ日は送り
て後家ノよ九郎右衛門の宅に至りて右近が横死の事情は密み嫁
國吾に其子細其評する所は語りし又萩田が出奔
を披し彼は捕らへき志しの旨を細に告る畢ぬば九郎右衛門も暫く
右近が横死を聞く概嘆しけるく思ふにしよんと道人の宅に
遣りて言の宅中へ金等の経は問ひしるは鞭れなく嫁國吾は離て
途ふは萩田有右衛門が毒手に命は殞せしは極まり何らく其詳なる
さく萩田が出奔を披し彼は捕でんとの旨を帰るの自ら揉困ある
否く我が然ても決定せり去むれは金等幸は一男子は遺せば是は教



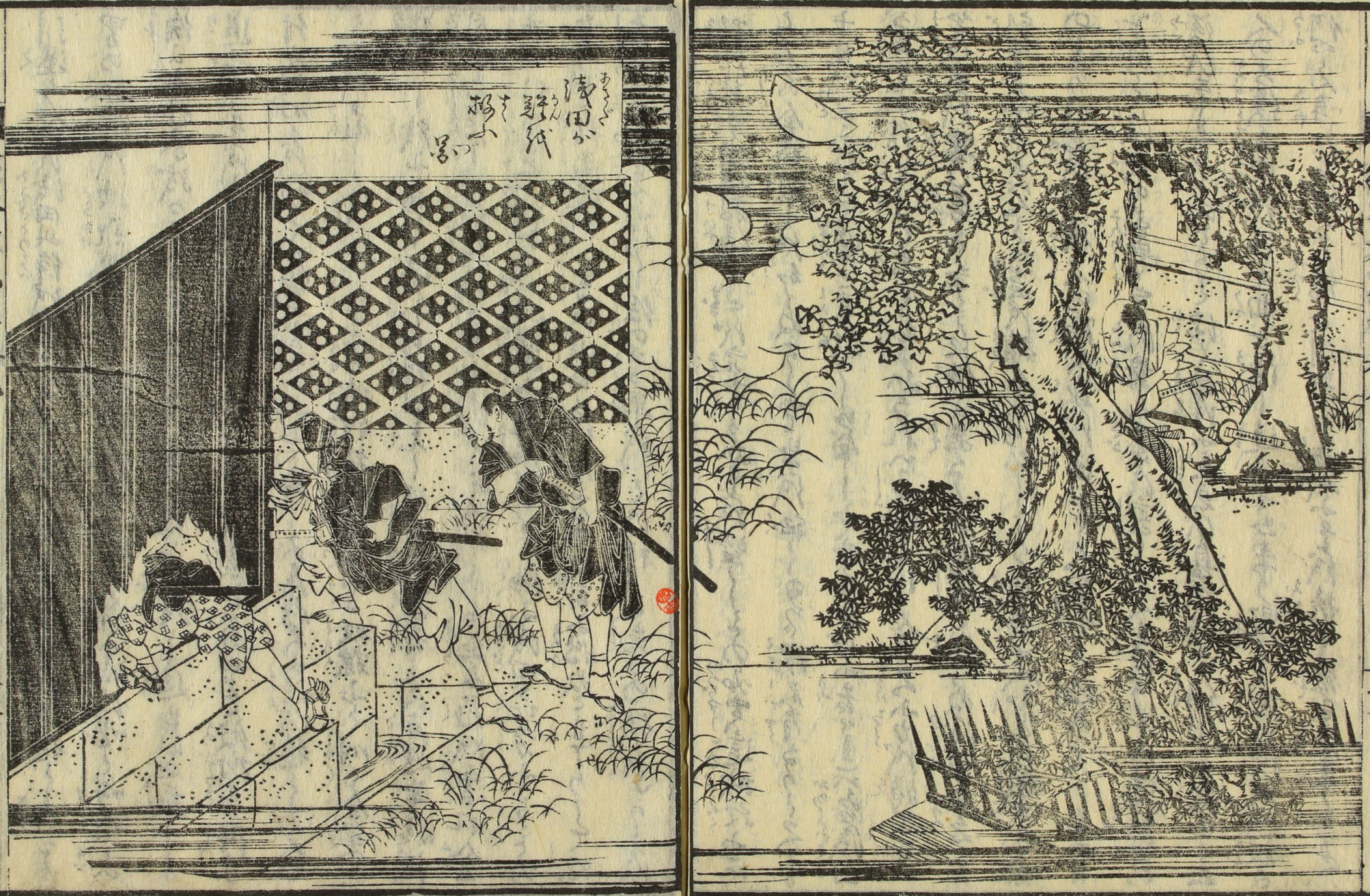
育して共に但に復讐を計る程理也なく最早其思ふに花田と
彼追に徘徊して必定訴訟ありて此花の支の為なるの事なき人等に
今右近が様子の様子を伺ふ様いかにも従人間は身の後難を恐るく
其追去らんは必定なりとなんかなる浅ましき彼の様子に付よ能く従ふる
なまじひに皆く其の秘して志のびくに溜読を素は彼が生家を聞出
さん事困難しかしながら且右上道人の弟子も益深をもつて遂に志しを遂
て家名の輝かんとは然るに小次郎が行末最も頼あり今後其の
某に要旨く小次郎が生長の後思ひ出てより専ら小次郎の励まし
て文武の二道の技藝術を学ぶして花田有右衛門が生家を捜し
求むるの趣にして揆手は歳月を送りける

花田姓名を更へて大長寺に住める話

浮雲の富貴観の栄えを子の遁る所にして世人尋ね知るものは知らざるべし
我常なりし折柄浅田有右衛門に大長寺の主山田勝右衛門が紹介す
よりて同家の倉庫の小吏に有付姓名を浅田文蔵と更始く衣食の
僕の業をしけるが性質貪欲なくこれを深く可不悦ままりしかば
いよいよもつて元の如く賜旅の身となして是より専ら身を謹く長居
お阿り様変に逢じて奸佞の臭し非なく苦労を計較して是ハ長官の
胎内僚の面くて支ケり其他の諸生にまで皆浅田が老えにその賞し
新進るの人々の趣に遇ふし偏なく内外の事を露識と浅田を依頼し
たりとも悦び彼の功く幾度も歎の揩くて今の何とも事物
本を仕しが一時庫吏の首と居寓他を備の面こを家に招え密に
商議しけるは某今日事を有ひ御内の金庫の巡視して一庫の後の

營壁よく〳〵目を遮て内ふ米穀を持出させ係より那和の陣へ軍用ふ
供らく常ふ出納させ事かく且四方の要害固く守ふ人の出る事を得さ
ぎそふ何く自ら巡視ふ急く早くも用意して見るを果ふ悪星具ら飛
遁延難し速ふ老臣中へ語て指揮ふ従へんと思ふ君別ふ異見あるべ
承べし衆之を聞くて皆先ひ稱く是を用ふの外なし此時浅田ふ末席
ふ連り居しが是を聞より密ふ陣中ふ飛り殿し倉の形状を跣踏候
てふさび席ふ就衆ふ進んで申ける其策老臣中ふ語へ昼ても陣中ふ
遺失粮を計較し盗を捕ゆの外別の指揮あるまじ先其盗を捕へ
て後米を欲しきで倉へ急の災を償ふべし是盤し屋房眉を顰く
此最早も各るりよ又ても何と言ふて急ふ盗を捕へんや浅田かさらく
陣中の地を要害堅固なく係り道の入替見ぬ何にを見出して来の

粮を計るふ僕粮俵あるを麦を穴ふさられ是を盗しその必定這城ふ出た
ら為倉の毀しを知ぬよふして米を秘し由ゆで僕不肖ならず入て
十月をもさずして盗を見顯し出置し此事もすげふ告げまべ若浅田
が意見ふ措もしいまゝく越るれいふ思てもんとおふ力を得て此へ
家来を妻子男ゝく事ゆえ俘を思ひて粮目を送らぬ浅田をなし
郎するれうりさべんゝ承盗を捕んと謀ひしより夜毎よ人を避て陣中の倉
の邊りに忍び行樹木の陰ふ身を隠くし人や来ると待居たり 今夜
をかく後夜の三更ふ至を案ふ違ず窃さく人来り是れ社盗賊ら
擾ひ来やまてそのたとし深く忽ち心を忍び息を潜く伺ひし小踞ふ〳〵三
人の小僕手巾を以て面を隠し近て出来り殿し倉の裡を揺ぶ
何やん噂たて捜るゝ様せ引出し每人ふ是を携て躬ふ元来し方く


滝田が

引返さんとせしハ浅田與作が見るより突然と樹間を飛出様に押へて是まて
男の前に御身ハ雑兵ハ霊宝を持ちて何方へ行ぞ其の捕手を呼んで是ハ
彼よ打伏んと残る二人ハ生手に一旦のがれ逃んとせしを投捨て追出し嶮しく
追詰て是ハ雑兵なれバ押倒し是に縄をかけて彼樹木に縛り
付秋の助の行く尾嶋が宅へ引立告しハ尾嶋大に悦び頓て三人の
其の者を厳しく詮議に此者皆賊徒掃除の者なる奴隷に付き金子を
盗出し浅ましく酒色の料に充て隠すべき時に告しハ尾嶋半蔵が
目論見て屋中に秘め置きて三人が其の他の悪事も露顕されて倉
吏の役司も事故なく一件速に落居せり是偏に浅田が切芳にぞ其の
なりせば浅田が功を賞せられ一等を進めて往還方の副司に補されて後
士道に達せし者にて役し其の身を以て親しく交る其の後に至て

浅田の功に家中ハ気を見て若輩の身にして其の器量巧者を称して殊に家人
の称誉を求めて

浅田が智囲で孫を得る話

斯て浅田文蔵は元来風流にて手を弄び文様に長じて我権之助
並にその半に是を入れて居たりしが一日南城主的矢を好せ玉ひ
練磨しけるに其の後の追随の面々射場へ召されて書院の庭前に継ぎ
して泉水の側に仮山の芝のかげに控へるが恰も三寸計の的を
如く見ゆる浅田は八分指をして今日も見上の名人もの的中常に
猶しからし此等の事より彼芝に的として一段中の識人あるに
よくハ当来の面々集合で弓矢を携へ泉水の汀に立並て夜の方
より頃日に射出せしに常に勝る射場の光景にて手々に打揃ひけるに

芝原まで見るも定かならぬ間も遥に近づけば一人も中の者とおもひしに其の
折節浅田文蔵庭の巡視をなしおもりの兵術を見て居たりしが心中に一計の
生じ奴等が眼を驚かさば当石弓道の妙を世に今まで見へし猛の鍋に近
のんと近士の前に進み僕等も若年より武術の好き射術もすこし
心得し所ありて鳴呼がましき若年なれど一芸仕りて御慰みを添へしと
云ふ此に人々望むところなりと其の弓矢を借り浅田文蔵及び汀は今お
後の呉の当瀬の石に緒の射前の周り切て席に其弟子の羽を置きて写
て同前の芝の真中に揚と中しが人々鳴と稱嘆して此浅田照明
くおる月の始く遠近の屋の的に対し眼を定めて射る時は百
発百中も新くするに足るの名誉僕が術を試んと言ひ出せしに今宵月の
上るまでかお前に出来るの人晴雲の中に今一芸の射て清家に備へて

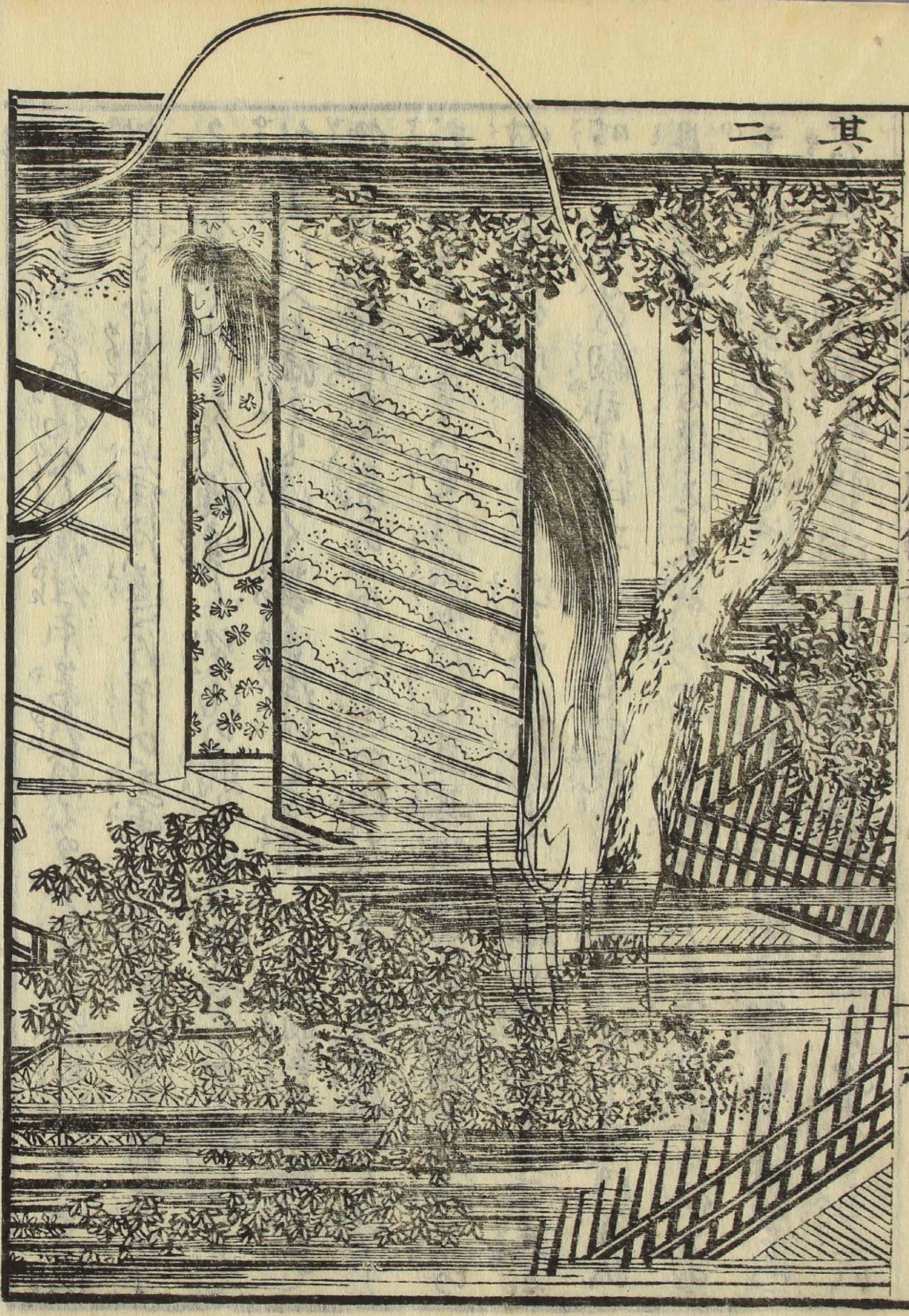
自得して云ふは此度浅田が自負を悪み常に精練の程あらはして嘲笑に
小弱の射るは何ほどの事やあらんと好く睹して那面の掛せ人とのと密に唱へて立ち返
けるをせ俗衆に浅田に射ひ此辺の射術者等は入る所なり敵くは給紙遠
人の貴公今一芸の御なぐさみまでに扨は見ぐ方の見かへて来く貴さん弟子に
一手射挟みしば此方よりも僕ひとつまん縁の其名もわけべしと言ければ
浅田言く御相手には不届来の僕く名伍く相の開て僕よりつづけて見まし
たる射抜ても以て赤裸にてれ鉄を退くだし少さまへ人々それも其
大様なるに悪気を生じ発弓を定めて三別ぬ射て其秋に及
びしが近侍の面々去来往く浅田の赤裸にて治海をうちめんと
毎年の掲の照して淡ろの城主酒田すひ何事をさる為の田の八除
ゐをみの善へしくの城主御めぐいつて奴の夜の手に持つせよ新進

婦妬く
忠行
縊殺と図

のふ吏として我近侍に對ひ人もなげなる廣言を吐しこそ安からね某が
ら年に雜りて後頭より出る奴が練磨の程は心識らる射法は其場にて見え
斬捨ると罵りて近侍の侍を打擲し田代を諌むる小書院に出てん
且へは浅田を始として家臣は後へ座に居並び居る中にも勇悍
の氣質なる一筆の武士と見えしが城主も神の皆ありて心
を生じぬの目にも知らぬは其家の勢ひを識ぬる時に田代は浅田が御の
御とやかんと先獨は思ひて居る家中の老臣は妻の
との中もある後は浅田に對ひて来る事を會釈して文辭
に後は廣く穴に入ぬんば安ん〔ず〕虎子は得ん見るべく一家の中に
外し其身の便宜とせんとのことありて氣は丹田に收まる
は端居して家来に引後眼を閉て臣下に命じて

とがめて又言揚くは弓矢の道に達しては必ず心弛む
と見る小目當の手練は達人の手の中は絹中に青く射貫けり
に立合面々が手に補嘆し腕の賭を明る道なく會釈して
紋中へ引入ぬ城主も深く其手練を稱し座の目は見すと
作して凡射術は六藝の一にして己の修ならず
精練のとり外に立て足踏を紀置其態は不遠
時に之に弦的中なる事に其理を説き終ても其人は見るべし
時に座客の嗣司浅田文藏は子の親しく其業は何ひ
且つて見ずする處は業に来て術に向ひ弦を手にして
其座に遊び紹介して我家に来りて向ひ見ては座中山田
が旧識にて故南家の家に於て武藝の師範を勤めたる次第

其二



繪本孝感傳義九

城主大に悦びてひきゐる社神より其家嶺の後ものゝ見へざりしとぞ即日高殿に仰りて新知百石を賜ひ屢衛の列に被擢すなはち浅田と名を改めさせ尚も精勤して累りに抜擢せられ数年の中に綿衣の賀恩を掌り安永の間有る年迎りは青雲の上に登り世にぞ知らしめける

死霊鼓讐の話

近ごろ是も山賊と云ふ者ありしが忠義といふ者の此路邦を拵へし後殺生を渡世の金銭を貯へるに至り一生涯を織経ぞ立つる事もありしまて終に精浚に出て僧となりしが其の両買を始め又三国の陰に登る者の手柴る所を妻とし安閑と日を送りけるにお年寄を通ふて女こと迄も漂浪して獵法の邪径に陥れたまふもあはれなる斯くして出合ひなびお納く別に一家を構へて住まひて

通ひしが這稚の妻聞付て妬の余り方ゝにて忠清が悪く的しと思ふ夜彼家に伺ひ入りて見るに忠義来とはいはず女而已が様態に臥く熟く睡むる体なれば忽悪念萌し下段の縄を以て一揺に柱に結付け繋なる女の首に縄を方の端を以て力に任せて引き締めければ女はたまらず呼び声を挙げ足を動して苦しみ狂ひ死にぬ此時忠清も外より入来り此騒動を見て一驚を喫ひしが元来残忍なる者なれば左まで怖れず妻と相談して其死骸を野外の林へ葬りてぞ退けて其日を過しに一月丈夫の夫は他出大勢に化し時とてす程なく多くの金銭を腰に付け近き辺の辻の茂みに隠れ行けるに看病とうるをえざる者も又代目に若く悩みし当力買籠や当年より同じ街なるべし

幸の序に紛ひしに其門口へ入るひとしく夫婦俄に走り惚させあふ忽
しれ小のく來りるぞやいほまで泝ちやゝりん今ぞ立去らし小背
戸の口へ走り出背しく仰きと見送べその侭息絶く話兜是よらしぬ
人く本具の思ひをかし是忌しく甚平が握の一し刀緒純のまゝふ中へ手を
漉かよりて強是の去しすんと感じいそりくかれ

繪本孝感傳巻之九終